

# 昭和枯れすすき

2005(平成17)年12月29日鑑賞(シネ・ヌーヴォ)



監督＝野村芳太郎／原作＝結城昌治／出演＝高橋英樹／秋吉久美子／池波志乃／下條アトム  
／伊佐山ひろ子／松橋登／鈴木瑞穂／稲葉義男（松竹配給／1975年日本映画／87分）

……1970年代は日本の高度経済成長の時代だが、そんな時になぜか大ヒットしたのが、『昭和枯れすすき』というあの哀しい歌……。両親を失い田舎から東京という大都会に出てきた2人だけの兄妹は、嵐にもまれながらいかに生きていくのか？ 私の大好きな秋吉久美子の20歳頃のエキセントリックな魅力と、あの時代の新宿歌舞伎町の雰囲気をつつりと味わってもらいたいものだ。

## 1975年、東京、新宿、歌舞伎町

映画が始まるとカメラはまず東京、新宿、歌舞伎町の風景を追っていく。この映画がつくられたのは1975年。そして私が弁護士登録したのが1974年4月。登録前の2年間の司法修習生時代の前期（1972年4月～7月）と後期（1973年12月～1974年3月）を千葉県松戸市にある寮に入り、湯島にある司法研修所に通ったため、私も少しは東京のまち（の遊び方）を知っているつもり……。

あの当時から新宿のまち、とりわけ歌舞伎町界隈の活気と猥雑さは独特のものだった。もっとも私たち若手の修習生が「遊んだ」ところは、川崎方面の方が多かったようだが……？

## 君はあの歌を知っているか？

この映画のタイトルを見て「ああ、あの曲か」とピンとくる人は、おじさん、おばさんのはず……。そう、この『昭和枯れすすき』とは、「さくらと一郎」という男女ペアが、「貧しさに負けた、いいえ世間に負けた」と高らかに歌いあげ

て(?)大ヒットしたあの名曲……。『昭和元禄』とも呼ばれた高度経済成長の真っ只中にありながら、今風の「勝ち組」に入ることができず、「枯れすすき」となって朽ちていくという「恨み節」の歌だが、これがちょっと斜に構えた若者たちにバカ受けしたわけだ。

70年安保をめぐる大きく盛り上がった学生運動も1969年1月の東大安田講堂の攻防戦を経て失速し、世の中はまさにこの歌のような虚無的な雰囲気がいっぱい……。

### 秋吉久美子=妹……？

私は秋吉久美子が大好き！ そのことは『透光の樹』(04年) (『シネマルーム6』339頁参照) で詳しく書いた。彼女が1973年の『十六歳の戦争』でデビューしたのは19歳の時。そして翌1974年には『赤ちょうちん』『妹』『バージンブルー』『炎の肖像』と立て続けに出演した後、1975年の『昭和枯れすすき』に至るわけだが、1976年の『あにいうと』を含めて、なぜかこの当時の秋吉久美子には妹のイメージが強い。

その妹のイメージを歌でバックアップしたのが、1974年に大ヒットしたかぐや姫(南こうせつ)の名曲『妹』。もっとも歌の世界における妹は、真面目で健気なイメージだが、映画の世界において秋吉久美子演ずる妹は問題児ばかり……。それはこの映画でも同じ。したがって、兄の原田(高橋英樹)はこんな手の焼ける妹に苦勞の連続だが……。

### 兄妹が住む文化住宅とは？

2005年11月突然日本を襲ったのが、姉齒元一級建築士を中心とする耐震マンション強度偽装問題。以降これは、日本国の建築基準法にもとづく建築確認制度の根幹を震撼させる大問題となっている。しかし実は、日本の建築物については、既存不適格建物という大問題がある。

これは、たとえば1981(昭和56)年の建築基準法(施行令)の改正によって、新耐震基準が設けられたため、1981年以降の建物はこの基準を満たさなければならないことになったが、これは裏を返せば、それ以前の建築物はこの新耐震基準

を満たしていないものが多いということだ。

私が大阪大学に入学し、松山から大阪に出てきた1967（昭和42）年当時、最初の3カ月はまかない付きの下宿に入ったが、それでは自由がきかないとばかりに、夏休み以降は1人でアパート生活に入った。

この当時の学生アパートは、4畳半～6畳1間で、今どきのワンルームマンションとは異なり、風呂なし、トイレなしは当たり前で、流しがあれば上等というレベルだった。

したがって、風呂は1週間に1度か2度銭湯に行くのが常識。そうだからこそ、あのかぐや姫の名曲『神田川』における、「洗い髪が芯まで冷えて……」という歌詞が共感をもって迎えられるわけだ。

他方、1人モノの学生ではない夫婦モノが住んでいたのが、2階建て、木造の〇〇荘という名の文化住宅。〇〇ハイツや△△マンションなどというしゃれた名前が生まれたのは、1970年後半から……？ 住宅事情の劣悪な東京の新宿で、田舎から出てきた兄妹の2人が住むところは、当然この〇〇荘という2階建て、木造のアバラ屋であるのは当然……。

ここでは兄妹ゲンカでもしようものなら、隣の部屋に丸聞こえ……。まあ、しかしみんながそんな生活レベルだったのだから、お互いさまか……？

## ちょっとベッタリしすぎでは……？

兄の原田は新宿警察署の刑事として勤務し、妹の典子は洋裁学校に通っている仲睦まじい兄妹というのが、この映画の設定。冒頭、口笛を吹きながら朝食をつくり、それが終わるとまだ眠っている兄貴を起こしに行った典子の足もとを兄貴がすくい、倒れた妹と兄貴がじゃれ合うという実に仲のいい雰囲気。しかしこれって、ちょっとベッタリしすぎでは……？ まあ、第三者がいらんお節介を焼く必要のないことかもしれないが……？

そして2人は一緒に文化住宅を出て、電車に乗り、典子の洋裁学校の前で別れた後、兄貴は新宿警察署へ。何とも微笑ましい限りだが、実はこれはかなりインチキ……？

## 女はわからん！

兄貴とバイバイした典子は実は洋裁学校へは行かず、某所で服を着替え、化粧を直した後、新宿のゲームセンターへ。まあそれだけならまだですが、やはり年頃の若い女には男が付きもの。今典子がつき合っているのは、何とチンピラの吉浦（下條アトム）。吉浦はトルコ嬢であるトシ子（伊佐山ひろ子）のヒモをしている遊び人で、原田も職務上よく知っている男。

しかしいくら遊び人といっても、トシ子にしてみれば吉浦が若い素人女とイチヤイチャしていることは気にいらぬはず。そんな気持ちが後に大問題を起こすことになるうとは……？

他方、ある日こんな2人がデートしている姿を目撃した原田は驚き、自宅で典子を問い詰めたが……？

## 典子には昔の男も……

典子は今19歳だが、兄貴には内緒で既に洋裁学校をやめ、今はスナックで働いていた。要するに、まじめに洋裁を勉強して働くなんてことは面倒くさいということだ。そんな典子が今吉浦とつき合っているのは、昔つき合っていた金持ちの御曹司中川（松橋登）にふられたせい……？

単純な兄貴にはわからないだろうが、19歳の典子は男づきあいにおいては既にあの手この手の計算ができるしたたかな女……。

したがって典子は中川と吉浦という2人の男を適当に操っていたというから驚き……？

そんな時起きたのが、吉浦の殺人事件。そして、その現場には典子が吉浦からもらったというネックレスが……。そして事件の直前、若い女が吉浦の部屋に来ていたという目撃者トシ子の証言も。さあ、新宿警察署の刑事として、原田はいかなる行動をとるべきだろうか……？

## 万年ヒラ刑事の悲哀も……

原田がいつも行動を共にしているのが、先輩刑事の井島（鈴木瑞穂）だが、彼

は昇級試験も受けず、現場一筋のいわば万年ヒラ刑事。原田はそんな井島が大好きで、よく一緒に飲みながら腹を割って話し合っていた。2人がいつも立ち寄る店は「ひさご」という居酒屋だが、そこで2人が交わす会話は仕事上の話かそうでなければ井島のグチばかり……。

万年ヒラ刑事の悲哀もわからないではないが、こんなことばかりくり返していたのでは、気のきいた女も近寄って来ないのでは……？

### 兄貴は意外とやり手……？

こんな2人の「ひさご」でのなじみの店員が民江（池波志乃）だった。何となくいい雰囲気だなと思って観ていると、原田は意外とその道にかけてはしっかり者（？）で、プライベートではこの民江としっかりと……。自分だって妹に内緒で（？）このようないい目をしているのだったら、「あまり妹に対して厳格に言うなよ」と第三者としては思うのだが、妹の幸福のためだけに生きてきた（？）と考えている兄貴としては、そうはいかないのかも……。しかし、所詮ハコ入り娘として育てていくことはできないのでは……？

### 新米刑事にはちと荷が重い……？

吉浦殺人事件は、新宿警察署の柴崎課長（稲葉義男）以下8名の刑事が捜査にあたることになったが、妹が第1容疑者とされた原田は必死で独自の捜査を……。この原田の動きを見ていると危なっかしく、ヤバイものばかり。現職刑事がこんな行動をとれば、今なら即クビにされることは明らか……。しかしそこは1975年の映画だから、多少強引なやり方でもまあよしとしよう……。

犯人逮捕の決め手となったのは、原田に対して「吉浦殺しの犯人を知っています」という女の声によるタレコミ電話。さて、これは一体ダレ……？ これによって事態は急転直下、解決の方向に向かったが……。

2006(平成18)年1月6日記